光緒流畫集

40055

一

400-55

光琳派畫集序

綱紀曰自大處起筆運味奇

乾坤豈情ナカランヤ。森羅萬象ハ、其動作ナリ、其言語ナリ。雲容水態ニモ玄奥ノ理アルヲ見ズヤ、啼鶯鳴蛙モ美妙ノ旨アルヲ聞カズヤ。春雨秋風、寒煖推移ノ際、星晨月夕、鳥兎循環ノ間、能ク靈慧ノ眼ヲ開テ、天地ノ心ヲ讀ミ、其姿ヲ寫ス者、是レ詩人ナリ、是レ美術家ナリ。

覆載ノ間、土壤ハ廣ク、邦國ハ多シ。到處、山川ノ狀勢ヲ異ニシ、氣候ノ冷熱乾濕ヲ同ウセズ、風光景象、各地自ラ等シカラザルハ、當ニ然ルベキノ理ナリ。隨テ國俗民性、千種萬樣、各周圍ノ天然ニ感化セラレテ特趣ヲ帶ビ、異彩ヲ放チ、地文ノ差、卽チ人文ノ異ヲ生ズ。而シテ其最モアリ、蓋シ美術家ト詩人トハ、一面ハ天地ノ祕機ヲ闡明シ、一面ハ國民ノ精華ヲ發揮スルモノナレバナリ。

成齋曰以下列國ノ景致ニ就キ簡敍排列シ傑然タル一巨幅畫景ナリ

夫レ人文發展ノ事タル、固ヨリ民種性能ノ遠否ニ因リ、又ハ異種族交渉ノ事情ニ依リ、又ハ文藝技術傳統ノ何如ニ關シ、頗ル複雜ヲ極ムルモノナルガ故ニ、一概ニ天然地理ノ狀況ヲ以テ論ジ去ルハ、偏見ニ類スルコトナキニアラザレドモ、然レドモ地方天然ノ感化ハ猶一大鑄造師ノ如ク、此般ニ沒入セラル、萬般ノ材料ヲ鎔化シ來ツテ、必ズ特殊ノ形態ヲ成シ、特殊ノ趣致ヲ印セズンバ止マザルナリ。試ニ顯著ナル例證二三ヲ擧ン。エーシヤンノ海中、無數ノ島嶼碁布セル間ニ突出シ、山海ノ風光明媚ヲ極メ、氣象溫和、天朗カニシテ氣清キ希臘ノ半島ハ、精麗快活ノ彫刻ヲ出シテ千古ノ標範ヲ垂レタリ。地中海ノ東隅、北ニレバノン山脈聳エ、東ニヨルダンノ峽谷綠樹繁茂シ、死海ノ窪地エシモンノ荒野相連リテ南ヲ限リ、葡萄熟シ牧羊肥エ、天惠豐カニシテ乳流ルヽト稱スルカナンノ地ハ、莊嚴高崇ナル猶太ノ聖詩ヲ產シタリ。ヒマラヤ山南、炎熱燬クガ如ク、深林大澤、鬱葱涯無ク、地味沃饒、生產豐富ナル印度ノ國土ハ瑰麗幽玄ナル特質ヲ其文明ニ鏤刻セリ。アルプス嶺南空碧ニシテ山靑ク、日暖カニ風香バシキイタリヤニ至リテハ、文藝復興シ、藝術ノ花咲キ亂レ、優雅婉麗ノ致ヲ擅ニシタル所ナリ。其他埃及建築ノ宏大ナル、支那文藝ノ雄渾ナル、英吉利韻文ノ莊重ナル、獨逸音樂ノ幽遠ナル、佛蘭西藝術ノ嫻雅ナル等、孰レカ天然ノ感化ニ因ラザラン、

綱紀曰地方天然感化之理說來精妙無復餘蘊

綱紀曰廣說海外諸國來而及我國筆情淋漓

我日本ノ島國ハ、東瀛洪波ノ間ニ屹立シ、山容水態清雅ニシテ醞藉、風光自ラ秀美ナ盡シ、彩雲晴嵐、朝煙暮靄、景象ノ變幻窮リナク、氣候中和ニシテ、風雨宜キニ適シ、異花珍草、飛禽鳴蟲、

綱紀曰語語稱揚然皆實非虛言也

種類甚ダ多ク、眞ニ天然ノ樂園ナリ。サレバ此土ニ棲息スル民人ノ性情、溫雅ニシテ快活、風流ノ嗜好頗ル深ク、夙ニ文藝ノ英華ナ煥發セリ。ツラツラ我國藝苑文華ノ歷史ナ回顧スレバ時ニ隨ヒ代ニ應ジ、當時ノ事相ナ反映シテ其趣致自ラ同ジカラザレドモ、其間ニ前後ナ

成齋曰活眼ニ非ザレバ一貫シテ渝ラザルノ特色アリテ存ス。コレナ之ヲ看破スル能ハズ

古來ノ有形美術ニ徵スルニ、推古朝ノ奇古、天平ノ豐華ヨリ、藤原ノ優雅、鎌倉ノ勇健、東山ノ瀟洒ナ經テ、德川ノ富麗ニ至ルマデ、皆一種共通ノ風姿ナ具シ、其間幾回カ還遷外邦ノ異風ナ雜ヘタルニ拘ラズ、常ニ消化渾融ノ効ナ遂ゲ、自國ノ特趣ナ保持シテ益〻精彩ナ發揚シタリキ。我日本ノ人文ニハ印度ノ如キ幽玄ノ旨趣ナシ。佛教モ、此土ニ入ツテハ平易ノ別派ナ立テ清淡ノ異風ナ呈シタリ。又支那ノ如キ尨大ノ格調ナシ。而シテ彼ノ文物モ、我ニ來ツテハ皆精緻輕巧ノ趣致ナ帶ビザルハナカリキ。

成齋曰此段人ノ道破セザル所

成齋曰一轉約言尤モ筆力アリ

然ラバ我日本ノ文化藝術ノ特色トハ何ゾヤ。他ナシ、優雅ノ趣、清和ノ致即チ是レナリ。而シテ此優雅ノ趣、清和ノ致ハ、主トシテ此風土氣象ノ薰陶ニ因テ化成セラレタルコト疑フベカラズ。

今本邦繪畫變遷ノ迹ナ尋チ、各派ノ源委ナ探究シ、純然タル我ガ特風ナ揚ゲタルモノナ求ムレバ、其最モ著シキモノ前後凡ソ五アリ、曰土佐、曰狩野、曰光琳、曰圓山及四條、曰浮世繪、是レナリ。其他巨勢ト云ヒ、雲谷ト云ヒ、三阿彌ト云ヒ、託摩ト云ヒ、春日ト云ヒ、海北ト云ヒ、岸ト云ヒ、文晁ト云ヒ、南畫ト云ヒ、皆是レ多少所謂和臭ナ帶ビザルハナケレドモ、尙ホ主トシテ唐宋元明清韓等ノ風格ナ追ヘリ。而シテ前ニ擧ゲタル五派ト雖モ、固ヨリ彼國ノ先撰ナ參セザルニアラザレドモ、最モ多ク本邦ノ趣致ナ發揚シ、全ク別樣ノ風姿ナ成シタルハ、明白ナル事實ナリ。

綱紀曰取於彼而化之於我則我爲主而彼爲客大得我國體

土佐派ノ開祖トモ稱スベキ覺猷光長等ノ飄逸流暢ナル筆法ハ、巨勢春日諸派ヨリ進ンデ一層日本的ナルモノニアラズヤ。狩野派ノ祖先正信元信ハ、夙ニ宋元ノ風格ナ和化シタルニ、古永德出デテ一轉化ナ成シ、探幽出デテ再ビ新面目ナ開キ、益〻本邦ノ韻趣ナ發揮シタリ、

綱紀曰其可謂我國精華矣

浮世繪派ハ、又兵衛ニ起リ、菱川トナリ、宮川トナリ、西川トナリ、勝川トナリ、愈出デテ愈新タニ、徹頭徹尾異邦ノ臭味ヲ雜ヘザリキ。應擧ノ圓山ニ於ケルハ、寫生ヲ基礎トシテ早ク明清畫ノ格ヲ脫シタリ。光琳派ニ至テハ、土佐狩野ヲ陶冶シ來テ、更ニ純然タル本邦ノ新趣致ヲ成就シ卽チ所謂醇ノ醇ナルモノナリ。之ヲ要スルニ、以上ノ五派ハ、皆清和ノ趣、優雅ノ致、洵ニ本邦精華ノ結晶シタルモノト謂フベシ。

試ニ本邦繪畫ノ特質ヲ剖析スルニ、二種ノ要素アリ。一ハ筆法ノ遒和ナルニアリ、一ハ配色ノ優雅ナルニ在リ、之ヲ前擧ノ五派ニ觀ルニ、或ハ其一ヲ得テ其一ヲ缺ギ、或ハ二者併テ之ヲ有ス、飜ツテ本邦繪畫ノ特長ヲ檢スルニ、其妙處ノ一ハ技法ノ抽象的ナルニアリ。著筆簡約ニシテ、能ク物象ノ眞髓ヲ穿チ、天趣宛然、氣勢活動神韻自ラ縹渺タリ。其二ハ技術ノ裝飾的ナルニアリ。裝飾的繪畫ハ、一面自然ノ物體ヲ模倣スベク、一面創意ヲ用ヒテ之ヲ改創スベク、線形布置ノ巧、色彩配合ノ妙、慘憺タル經營ヲ用ヒテ快適ノ美ヲ成セリ。抑モ光琳派ノ本邦繪畫史上ニ於ケル地位ハ、洵ニ純然タル本邦繪畫ノ粹ヲ抽キ、抽象的技巧ニ長ジ、最モ裝飾的ノ形式ハ、東西ヲ論ゼズ齊對的ニシテ羈束セラレ、韻趣ニ乏シク、或ハ整律的ニシテ單調ニ流レ、變化ノ妙ナキヲ憾トス。獨リ光琳一派ノ裝飾的技術ニ至テハ、意匠斬新、按排奇拔、而カモ布置ノ調和ヲ得、殊ニ色彩配合ノ錬熟ナル、物象描寫ノ婉曲ナル、眞ニ空前ノ絕技ト謂フベシ。蓋シ裝飾的意匠ハ、素ヨリ邦人擅長ノ特技ニシテ、前代既ニ異常ノ發達アリシカドモ、光悅光琳ノ一派ニ至テ巧妙ノ絕頂ニ達シタルコトハ爭フベカラズ。

所謂光琳ノ一派ニ就テ之ヲ觀ルニ、光悅ハ、桃山豪雄ノ氣風ヲ帶ビ、卓拔ニシテ壯快、高雅ナル逸韵ヲ顯ハシ、宗達ハ、筆氣渾厚ニシテ、畫致沈重、古土佐ノ心髓ト狩野ノ風骨ト併セテ之ヲ得タリ。光琳ニ至テハ光悅宗達二大家ノ後ヲ承ケ、元祿華奢ノ時風ニ投ジ、金碧燦爛、賦彩鮮麗、婉曲ノ筆ヲ用ヒ、奇警ノ才ヲ振ヒ、新意ヲ出シ奇趣ヲ顯ハシ、圖案綜合ノ妙ト、色彩調和ノ巧トヲ恣ニシ、遂ニ斯派ヲ大成シ、殊ニ裝飾圖案ニ至テハ古今ニ獨步スルノ概アリ。又山水花卉ノ形狀多クハ是レ寫生ニ由テ脫化シタルモノニシテ、天然ノ約束ヲ按排シテ、人ヲ

シテ一見其奇ニ驚キ、熟視始メテ其妙ヲ發見シ、久キニ及ンデ益、其巧ニ歎服セシム。且ツソレ沒骨法ヲ以テ圓轉タル形相ヲ描キ、墨汁ニ石青ヲ混ジ或ハ乳金ヲ和シ、暈染ノ妙ヲ極メ、濃淡ノ巧ヲ盡スハ、宗達ニ依テ創剏セラレ、光琳ニ依テ大成セラレタル新法ニシテ、筆痕ノ宛轉タル、墨色ノ淋漓タル、意匠ノ新奇ニシテ道宕ナル、斯派專擅ノ長所ニシテ他ノ企テ及バザル所ナリ。其他光甫ノ畫風優雅ニシテ趣致ノ高尚ナル、乾山ノ筆意醇樸ニシテ氣韻ノ閑逸ナル、雨華菴抱一ノ鮮妍濃麗ノ色彩ヲ用ヒテ華美洒落ノ胸懷ヲ傾盡シタル、前後相繼デ奪フベカラザル特趣ヲ斯界ニ樹立シタルハ、亦タ壯觀ニアラズヤ。

綱紀曰光琳一派諸氏得此稱揚應取目地下

近來泰西諸邦ノ類リニ東洋ノ文化ヲ吸收スルニ及ンデ、其藝術頗ル別趣ヲ成スニ至レリ、殊ニ裝飾ノ畫風ニ一大變革ヲ呈シ、輕巧洒落ナル光琳一派ノ風趣ノ著シク其内ニ包含セラレタルヲ見ル。是レ專ラ光琳一派ノ畫ノ能ク裝飾畫ノ原則ニ適當セルガ故ニ外ナラズ。然レドモ事物ニ長短得失アルハ免レ難キノ數ニシテ、光琳一派ノ畫弊ヲ舉ゲバ固ヨリ一二ニシテ止マラザルベシ。學者ノ精究周慮シテ取捨ヲ愼ムベキハ、論ヲ俟タズ。

成齋曰此論亦ナカルベカラズ

光琳一派ノ畫史壇上ニ於ケル位地ハ、上述ノ如シ、此派ノ畫蹟ヲ顯揚シ、其畫法ヲ研究スルハ、藝術發達ノ上ニ於テ洵ニ有要ノ事ト謂フベシ。田島志一氏ハ、本邦藝術ノ精華ヲ發揚スルニ忠ナルノ士ナリ。夙ニ光琳一派ノ畫風ノ藝苑ニ於ケル一異彩ニシテ甚ダ尊重スベキモノナルヲ認メ、博ク攻究スル所アリ、今光琳派畫集ヲ發刊シテ、遍ク此派ノ名品傑作ヲ網羅シ、其妙趣ヲ内外ニ傳ヘントシ、來テ序ヲ予ニ請フ。予其美舉タルヲ贊シ、乃チ古今内外美術ノ沿革ヲ概敍シ、特ニ此ノ派ニ對スル所見ヲ列擧シテ以テ序トナス。

九鬼成海識

上下數千年繪畫論、光彩奪目、非公夙專心於美術界、何以能到於此、敬服感服。

副島種臣

斯派ノ畫ヲ發揚シ、殊ニ光琳ヲ以テ醇ノ醇トナスガ如キ、實ニ吾心ヲ獲ルモノト謂フベシ、蓋シ光琳ノ畫ハ近邇光悅宗達ニ得ルモノト雖モ、遠遠推古ノ奇古、天平ノ豐華ヨリ胚胎シ來リテ、所謂抽象的技巧、裝飾的趣致ヲ成就

セシモノ、尚ニ然リトス、高見高見、予ハ服膺ニ堪ヘザルナリ。

明治癸卯二月　　水車子迂弟妄批

絢爛ノ筆、開活ノ眼、絶叫大呼シテ世人ヲ提醒ス、抑又成海君新技ニ深諳アルノ一斑ヲ窺ヒ覩ルベシ、讀果テ案ヲ擊テ激賞ス、

癸卯春二　　成齋老人東野釋妄言

意到筆隨、光彩絢爛奉目、其卓識藻思、使人嗟賞不能已、

明治癸卯二月念六日　　厚知南摩綱紀拜讀

光悦派畫集

總說

昔者天正年間、豐臣秀吉、蓋世の雄圖を抱き、百萬の軍旅を提げて、連戰連勝、遂に能く海内を統し、天正を平定するや、意氣盛滿、大に土木を興し、難波の石山城、京師の聚落第、及び伏見の桃山城の如き高樓傑閣を建築して、一代の豪奢と華麗を盡しければ、上の好む所、下忽ちの之に倣ひ、從前崇ばれたる清淡幽雅の趣は纔に茶事の間に殘喘を保つの外、繪畫工藝諸品は盡く濃華妍艶の致を競ひ、日本美術の史上、茲に一轉期を作るに到れり、即ち狩野永德及び其義子山樂、海北友松、長谷川等伯等の繪畫に於ける、埋忠重吉の刀鐔、後藤德乘の裝劍具、樂常慶の茶器に於ける、盛阿彌の漆器、是閑吉滿の假面に於ける、孰れも皆當代屈指の名人にして、所謂桃山の迹を印せざるはなく、當時一般の藝術は秀吉の氣象に感化せられて瑰奇壯麗の境に入れり

其後天下の政權は德川氏の掌に歸し、江戸はすがに京師は千年の古都にして、歷代の舊趾遺品處々に散在し、加ふるに山紫水明の觀ありしかば、豐德二氏の興廢に關せず、永く此地に留まりし藝術家も亦尠からず、即ち前に擧げたる狩野山樂、埋忠重吉の如き、又靈想妙思、繡虎の手、燃犀の眼、能く空前の技術を發揮したる本阿彌光悦の如き、其最も盛名を負へるへるものなり、而して此等の名匠は皆是れ豐臣時代の遺物なれば、隨て其作る所の繪畫及び工藝品は大抵皆豪爽華麗なる桃山の趣味を存せざるなし、就中光悦の作品を以て殊に然りとす

光悦は由來畫家の子孫にあらず、祖先の衣鉢を受けて刀劍の鑑定、磨礪、淨拭に從事したり、而かも賦性書畫を好み、書は夙に空海を慕ひて其神に入り、後また道風の古今集に就きて假字を習ひ、遂に其妙境に達せり、畫は海北友松を師とし、更に古土佐の風を參酌し、諸家の粹を採りて新たに一派の畫格を創す、陶器は長次郎の樂燒を好みて赤釉の物を作れり、斯く多藝なる中にも、蒔繪は其最も得意とせし所にして、巧みに書畫を應用して一種の新意

を出だし、鉛錫青貝などをあしらひて繪樣を奇巧ならしめたり、而して其作品は啻に豪爽華麗なるのみならず、氣品亦高雅逸韻迥然として凡俗を脱するの趣あり、蓋し是れ光悅の天禀高尚なるに加へて、常に山川清淑の氣を呼吸し、殊に塵俗の曾て到らざる洛北鷹峯の勝區に草庵を構へて、靜かに心を茶禪に養ひ、毫も意を名利の悲に馳せず、雅懷綽々として餘裕ありしに由らずんばあらず

光悅と時を同うして、俵屋宗達なる者あり、其畫風亦頗る光悅に似、且つ種々の新趣を現はせり、其師受先後の如き、今之を考ふるに由なしと雖も、光悅と共に其名を記憶すべき一大家なり

抑德川氏の國を建つるや、深く豐臣氏の壯麗豪華に鑑み、勤儉質素を旨として上下を化せんと力めたり、然れども桃山瑰麗の餘風未だ全く地を拂ふに至らず、加ふるに慶長、元和の戰雲既に歛まりて、弓は囊を出でず、刀は鞘を離れず、世を擧て太平無事に謳歌し、武士の元氣も復た之を發揮するに地なく、其自然の結果として風流是れ競ひ、優美是れ尙び、專ら裝飾に意匠を凝らすの風、貞享、元祿の頃益盛なるに至れり、此時に方りて世に出で、光悅、宗達の二家を祖述して大に手腕を揮ひたる偉才を誰とか爲す、實に我光琳其人なりとす

光琳が少時の師は果して何人なりしか、今詳かに之を知るを得ず、土佐派は住吉具慶の門人なりと云ひ、狩野派は常信に就て學びたりと云へり、想ふに二派の畫法を兼ね修めたることは固より疑ふべくもあらず、且つ最も光悅、宗達の畫風に私淑し、更に自ら機軸を出だして遂に畫界に一生面を開くに至れり、蓋し光琳は非凡の天才にして、意匠に富み、圖案に長じ、加ふるに筆致婉麗、賦彩豐富を極め、一花一葉の微と雖も、一たび光琳の筆に上るとき は、陳套倏ち化して斬新となり、凡俗忽ち轉じて神奇となるの妙あり、光琳這般の妙技を抱いて元祿豪奢の時に際會す、其妙技は前後に比儔なく、其豪奢は古今希有なり、而して兩者今や相投合す、宛ら珠の盤を走るが如く、盤の珠を走らしむるが如く、燦爛たる才華、回轉たる筆鋒、互に映發して、縱横自在、殆んど端倪すべからざりしもの、決して偶然にあらず、要するに元祿の豪奢は能く光琳を生出し、光琳また能く元祿時代を盛飾したることは爭ふべ

からざる所なり

光琳の技は繪畫の一偏に止らず、髹漆に於ても亦能く光悅の風を紹述し、更に自家獨造の意匠を加へて一派を開きしかば、世に之を呼びて光琳蒔繪と稱し、大に珍重せり

蓋し光琳の繪畫及び蒔繪は、倶に華美艶麗を極めしも、毫も卑俗の點なく、高雅道逸なりしにより、上下貴賤、如何なる階級の玩賞にも値し、何人の嗜好にも適せり、是れ卽ち光琳の光琳たる所以にして、世人の讃美を受くるの廣きも亦宜なりと謂ふべし、但、其畫の動もすれば、繪畫の範圍を脫して、裝飾的の特質を帶び、模樣の傾向を有するが如きは、殊更に時代の好尙に投じたるに因るものにして、卽ち是れ光琳の短處たると同時に亦其特種の長處なりと云ふべし

光琳と同時代に於て、江戸の藝術界を賑はせしもの、畫家に菱川師宣、英一蝶等あり、彫金家に横谷宗珉あり、髹漆家に小川破笠、古滿休伯、青海勘七等の如き諸名工ありしと雖も、彼等の技倆は未だ以て我が光琳を凌駕するに足らざりしなり

斯くて光琳の名聲藉甚たると共に、其畫風を慕ふて之を學ぶ者亦頗る多し、光琳の弟乾山は言ふに及ばず、何帛、始興、宗理等の如き、孰れも皆光琳の畫法に規仍し、盛に一派の畫を作りたるが故に、天下靡然として其風に向ひ、衣服調度より日常百般の物に至るまで、すべての模樣に多く光琳の畫風を用うるに至れり、光琳の歿後數十年にして江戸に酒井抱一あり、光琳に私淑して最も能く其遺法を蹈襲し、德川氏末葉の畫界に燦然たる光彩を放てり、之を要するに、日本近世の藝苑が光琳に負ふ所の甚だ大なることは、何人も容易に看取するところならん

啻に本邦の藝苑が光琳に負ふ所の大なるのみにあらず、近時其畫若くは繪本の類、歐洲に傳へらるゝに迨び、彼の土の藝術にも亦多少の影響を與へたるものゝ如し、墺國ブラークの畫家にして且つ彫刻家たるエミール、オールリック氏嘗て曰く、今日歐洲の大家と稱せらるゝ者と雖も、光琳の畫によりて大に得る所あるを疑はずと、知るべし光琳の畫が與へたる影響の廣く且つ大なることを

からざる所なり

光琳の技は繪畫の一偏に止らず、髹漆に於ても亦能く光悅の風を紹述し、更に自家獨造の意匠を加へて一派を開きしかば、世に之を呼びて光琳蒔繪と稱し、大に珍重せり

蓋し光琳の繪畫及び蒔繪は、俱に華美艶麗を極めしも、毫も卑俗の點なく、高雅道逸なりしにより、上下貴賤、如何なる階級の玩賞にも値し、何人の嗜好にも適せり、是れ卽ち光琳の光琳たる所以にして、世人の讃美を受くるの廣きも亦宜なりと謂ふべし、但、其畫の動もすれば、繪畫の範圍を脫して、裝飾的の特質を帶び、模樣の傾向を有するが如きは、殊更に時代の好尙に投じたるに因るものにして、卽ち是れ光琳の短處たると同時に亦其特種の長處なりと云ふべし

光琳と同時代に於て、江戸の藝術界を賑はせしもの、畫家に菱川師宣、英一蝶等あり、彫金家に横谷宗珉あり、髹漆家に小川破笠、古滿休伯、青海勘七等の如き諸名工ありしと雖も、彼等の技倆は未だ以て我が光琳を凌駕するに足らざりしなり

斯くて光琳の名聲藉甚たると共に、其畫風を慕ふて之を學ぶ者亦頗る多し、光琳の弟乾山は言ふに及ばず、何帛、始興、宗理等の如き、孰れも皆光琳の畫法に規仍し、盛に一派の畫を作りたるが故に、天下靡然として其風に向ひ、衣服調度より日常百般の物に至るまで、すべての模樣に多く光琳の畫風を用うるに至れり、光琳の歿後數十年にして江戸に酒井抱一あり、光琳に私淑して最も能く其遺法を蹈襲し、德川氏末葉の畫界に燦然たる光彩を放てり、之を要するに、日本近世の藝苑が光琳に負ふ所の甚だ大なることは、何人も容易に看取するところならん

啻に本邦の藝苑が光琳に負ふ所の大なるのみにあらず、近時其畫若くは繪本の類、歐洲に傳へらるゝに迨び、彼の土の藝術にも亦多少の影響を與へたるものゝ如し、墺國プラーク の畫家にして且つ彫刻家たるエミール、オールリック氏嘗て曰く、今日歐洲の大家と稱せらるゝ者と雖も、光琳の畫によりて大に得る所あるを疑はずと、知るべし光琳の畫が與へたる影響の廣く且つ大なることを

茲に於て暫らく光琳に對する歐洲賞鑑家の言ふ所を聞かん乎、英國の博士アンデルソン氏は、頗る日本の美術工藝を研究したる人なり、曰く、光琳の畫たるや、描寫設色俱に他の流派に似たる所なし、著色極めて鮮麗豐富なるなると共に、意匠奇拔にして、描寫排置も亦往々高妙の域に達す、然れども人物及び獸を寫すに、非常なる人爲的點綴を施し、殆んど戯畫に類せしむることあり、其描く所の男女は姿態容貌、生氣に乏しきこと、往々率意に作れる人形に異ならざるものあり、其馬及び鹿は赤白を塗抹せる兒戯の玩具の如し、此の如き短所あるにも拘はらず、其圖畫の裝飾的本質に至りては世間また之に匹敵するものなし、光琳が一般の裝飾術の上に及ぼしたる感化は大にして不朽の功績なりとすと、又ゴーンス氏の言を引けり、其言に曰く、光琳は恐らく日本畫師中の最も新機軸に富み、且つ獨得の長ある人ならん、其畫風は何人も之に似ることなく、余輩歐洲人をして一見驚異せしむ、何となれば、其畫風は唯之を一見すれば、余輩歐洲人の嗜好と慣習には恰も正反對の極端に在るものゝ如くなればなり、其畫たるや實に感動を主としたるものゝ極なり、若し然らずとするも、少なくとも外觀上は頗る感動的なり、何となれば其手腕は流暢輕妙にして平滑なればなり、其筆勢は豐華婉曲にして且つ平穩なれば、光琳の意匠は常に奇異にして、人意の表に出で、一種異樣にして稍兒戯に類するの奇僻に陷りたり、是れ觀る者をして驚異せしむる所なれども、仔細に之を熟視するときは、一種言ふべからざる趣味を捉ふることを得べし、余は一々分析して云ふこと能はざれども、觀る者をして自ら一種の調和に心醉せしむるものあり、又時には兒戯に均しき外觀を有すと雖も、其中自ら驚嘆すべき形體の學理あり、又裝飾的美術に最も緊要なる綜合の精神に至りては、日本畫家中能く之と肩を比するものなし、殊に晩年の作に至りては、從前の主角を去りて自ら圓滿に歸したりと、この評眞に能く肯綮を得たるの說なりと謂ふべし

墺國のオールリック氏は、また最も光琳を崇敬服せしむる者其人に乏しからず、然れども、余をして愛慕已まざらしむる者に至りては太だ多からず、佛國當時の畫家デッカ氏は希有の大家にして余は之に敬服すと雖も、未だ

愛慕の念を生ずること能はず、余が最も愛慕する所のものは、古人にて唯佛國のミレットと一人あるのみ、然るに今やまた一人の愛慕すべき畫家を日本に得たり、そは實に尾形光琳なり、其千變萬化の態と美を色と形に現はし得たるは、空前絶後の技倆なりと謂ふべし、光琳は日本第一の畫家なり、否世界古今第一の彩色家と稱するも敢て不可なしと、何ぞ其光琳を推賞するの甚しきや、光琳はこの隔世天外の知音を得て、また些の遺憾なしと謂ふべきなり

斯の如く、光琳は啻に日本の藝術史上に於ける一大巨匠たるのみならず、亦實に世界の美術史上に於ける一大家なり、奈良平安より東山に至るまでの名匠鉅工は玆に之を措きて云はず、近古三百年間に於ける畫家中、能く世界に向つて其技を誇るに足るものは、先づ指を我光琳に屈せざるを得ず、吾人は平生深く斯の一派の妙技に推服する者なり、故に其遺作の多くを世界の賞鑑家、藝術家に紹介し、以てます〳〵其眞面目を發揮せんと欲し、玆に本書の發刊を企てたる所以なり

明治三十六年二月

編者識

凡例

一本書は專ら光琳及び其流派を汲む重もなる畫家卽ち乾山、何晃、始興、抱一、其一等の作品を撮影登載するものとす

一光琳一派の繪畫は玉石混淆、眞贋容易に判別すべからざるもの頗る多し、故に本書を發行するに當り、其材料は勉めて愼重の鑑査を遂げ、十分の考究を盡して之を撰擇したるは言ふまでもなく、特に其優秀なるものゝみを採りて之を掲載す

一本書題して畫集と云ふ、卽ち主として繪畫を掲ぐるは勿論なるも、蒔漆陶器等の如き工藝品にして、斯派の眞價を發揮するに足るべき傑作は併せて之を撰載す

一各畫家の傳記は之を詳述して其作品の前に掲げ、且つ各原品の種類、名稱、寸法、所藏主等は勿論、畫題及び彩色に至るまで其概要を略說す

一原畫の彩色の妙處を示さんが爲め、每册數葉の木版彩色摺を挿入し、其他はすべて精巧なる寫眞版に附して印刷す

一本書は四册を以て全部完結とし、各册の挿畫を凡三十葉宛とす、但し一葉に二點以上の畫を印刷することあるにより、全體の畫數は殆んど二百點に上るべし

一本書に其作品を掲載する畫家の印譜は、曾て抱一の掇拾せるものを補遺して第四册の末尾に掲げ、以て賞鑑家の參考に資せんとす

一光琳一派の作品は最も裝飾的趣致に富めるを以て、其作品を紹介し、其眞面目を發揮せんとするの美術書も、また最も裝飾的ならざるべからず、故に本書は用紙、印刷、製本、其他すべての點に於て、十分の注意を拂ひ、出來得る限り其體樣を完美ならしめたり

一本書の發行に際し、伯爵松方正義君は、夫の光悅等と共に寬永の三筆と稱せられたる松花堂昭乘の墨蹟に倣ひ、表題の文字「光琳派畫集」を揮灑して之を贈られ、男爵九

鬼隆一君は特に莊重なる長篇の序文を作りて光彩を添へられ、子爵福岡孝弟君、子爵長岡護美君、帝室博物館總長股野琢君、松浦厚君、文學博士小杉榲邨君等は材料蒐集上種々の助力を與へられ、又貴顯名族其他凡そ藏輻家を以て聞ゆる紳士諸君は其珍藏撮影の自由を許され、爲めに材料豐富なるを得たり、是れ編者の頗る光榮とする所、玆に謹んで謝意を表す

一本書挿畫の彩色に就き、抱一上人第四世の衣鉢を傳ふる酒井道一氏が終始懇切なる注意を與へられたるを謝し、又柴田常吉氏が材料の撮影を擔當して其技巧を盡し、安藤一勝氏が彩色畫臨摹の勞に服して其精力を注ぎ、又小塚彦三郎、石塚彦太郎の二氏が木版の彫刻及び摺刷に從事して其妙技を發揮したるが如き、亦皆予が記憶する所なり

編者識

尾形光琳

超凡の妙想を揮ふて、繪畫其他の藝術界に一生面を開き、能く元祿豪奢の時好に投じて一世を風靡したる我光琳の遠祖を糺ぬるに、豐後國の豪族緒方三郎惟義七世の孫に緒方新三郎伊春と云へる者あり、將軍足利義昭に仕へて祿五千石を食む、義昭其職を失ひ、足利氏亡ぶるに迨び、隱遁して復た世に出でず、是れ卽ち尾形氏中世の祖なり

伊春の子を新三郎道栢と云ふ、北野神社の傍なる尾形社に奉仕し、其神餞を飲む、因つて其姓字を尾形と改む、道栢、木阿彌光二の長女を娶りて一男を擧ぐ、其名を新三郎宗栢と稱す、宗栢に至りて、始めて東福門院の呉服物御用を勤む、宗栢の子を宗謙と云ふ、宗謙、通稱を主馬と稱し、別に浩齋と號す、父の業を繼ぎて呉服物御用を勤めしが、頗る文藝を好み、光悅の門人兒島宗眞に就きて畫を學べり、宗謙に二子あり、長は卽ち光琳にして、次は乾山なり

光琳、名は惟富、後に方祝と改む、幼名を市之丞、俗稱を屋金屋藤重郎と云ふ、又青々齋、寂明、道柴、淵齋、伊亮、長江軒等の號あり、晩年に至りて日遠宗に歸依し、落髮して日受と云ふ、法橋に敍せらる

尾形氏の家もと貧寒なりしが、宗謙の代に至りて頗る富有となり、鉅萬の資產を有せしかば、光琳は少時より風流韻事に耽り、不審庵宗佐の門に遊びて茶事を學び、又畫を父宗謙に習ひ、後狩野常信の敎を受け、且つ住吉具慶の門にも入りて其家法を受けしと云ふ、後又古土佐の畫格を參酌し、更に光悅、宗達の風を慕ふて、之に私淑し、遂に新意を出だして一家の格を創するに至れり、其描く所の山水人物花卉鳥毛等多くは金銀泥を雜へて色彩を施し、濃艶華美を極む、就中草花の設色尤も巧みなり、且つ水墨の畫を作るや、墨汁を以て描きたる上に乳金或は乳銀を加へて奇想人意の表に出づるものあり、又頗る蒔漆の技に長じ、硯箱、茶器等に於ける蒔繪の如き、殆んど精巧の極點に達せるものの多し

光琳、嘗て京都の祝馬口に一茶亭を構へ、園中に多くの奇花珍卉を植ゑ、仔細に其開落の狀を見て、終日之を寫生し、少しも倦怠の色なかりしと云ふ、光琳の花卉に妙を得たるものは、實にこの祝馬口の茶亭に於ける刻苦に出でたることを知るべし

また光琳が意匠に富み、圖案に巧みなりしことに就きて面白き逸話あり、京都の銀座方または諸侯に出入する商人の催せる宴會には、光琳必ず招かれて衣服調度等の意匠を授くるを常とせり、當時此等の商人は互に華奢を競ひ、宴會ある毎に、妻女をして幾度も衣服を更めしめ、其意匠の斬新なるを以て誇るの風あり、而して同一色の衣服を更ふること七八回の多きに達し、而かも一々其意匠の異なりて人目を新たにするが如きは、其最も贅澤なるものなりしが、是の如き意匠の變化は惟り光琳能く之を案出し、他匠の空も模擬する能はざりし所なりと云ふ

また或る年の春、光琳、某々銀座方に誘はれて嵐山の櫻狩に行きしが、筍皮に握飯と好下物とを裹みて之を携帶せり、やがて一行嵐山に着し、各、金銀螺鈿を鏤めたる重箱を出だして、互に其善美を誇るにぞ、光琳獨り筍皮を開きしに、皮

墓一面金箔を押し、且つ山水花鳥の類を見事に描畫しありしかば、さすがに華者に訪れる銀座方も大に驚きて舌を捲けり、既に終るや、彼等は重箱を納めて歸りしも、光琳は風のまに〳〵件の筍皮を大堰川に流して顧みざりしと云ふ、此一事たま〳〵以て光琳が元祿時代に於ける風尚の代表者たりし所以を知るに足れり

然るに此筍皮の事、官の知る所となりて、光琳爲めに京都を追放せられたり、此に於て悉く其家財を售りて江戸に下りしが、居ること幾くもなく、赦されて再び京都に歸れり、これより深く心を佛乘に寄せて、日夕の行事を慎み、靜かに晩年を送りしが、享保元年丙申六月二日、病を得て歿す、年五十有九(五十二、五十六、六十二等の諸說あれども、今は光琳の苗裔たる小西氏の筆記に依る)遺骸を京都妙顯寺内の本行院に葬り、法號を長江軒寂明青々光琳居士と云ふ

光琳、某氏の女多代子を娶りて二子を擧ぐ、長男、名は方濟、通稱を壽市郎と云ふ、出でて銀座方小西淺九郎の養子となる、次男勝之丞、其家を嗣ぐ、然るに勝之丞早世し、光琳の家名終に斷絶せるは惜むべし

光琳の畫法を傳へたる者、立林何鼎、渡邊始興等皆名あり、光琳の歿後六十餘年にして江戸に酒井抱一あり、光琳を仰いで隔世の師とし、盛に斯派の畫を作れり、青々齋の法灯が再び光輝を世に放てるもの、實にこの隔世の一弟子が功なり

光琳派畫集第一册

目次

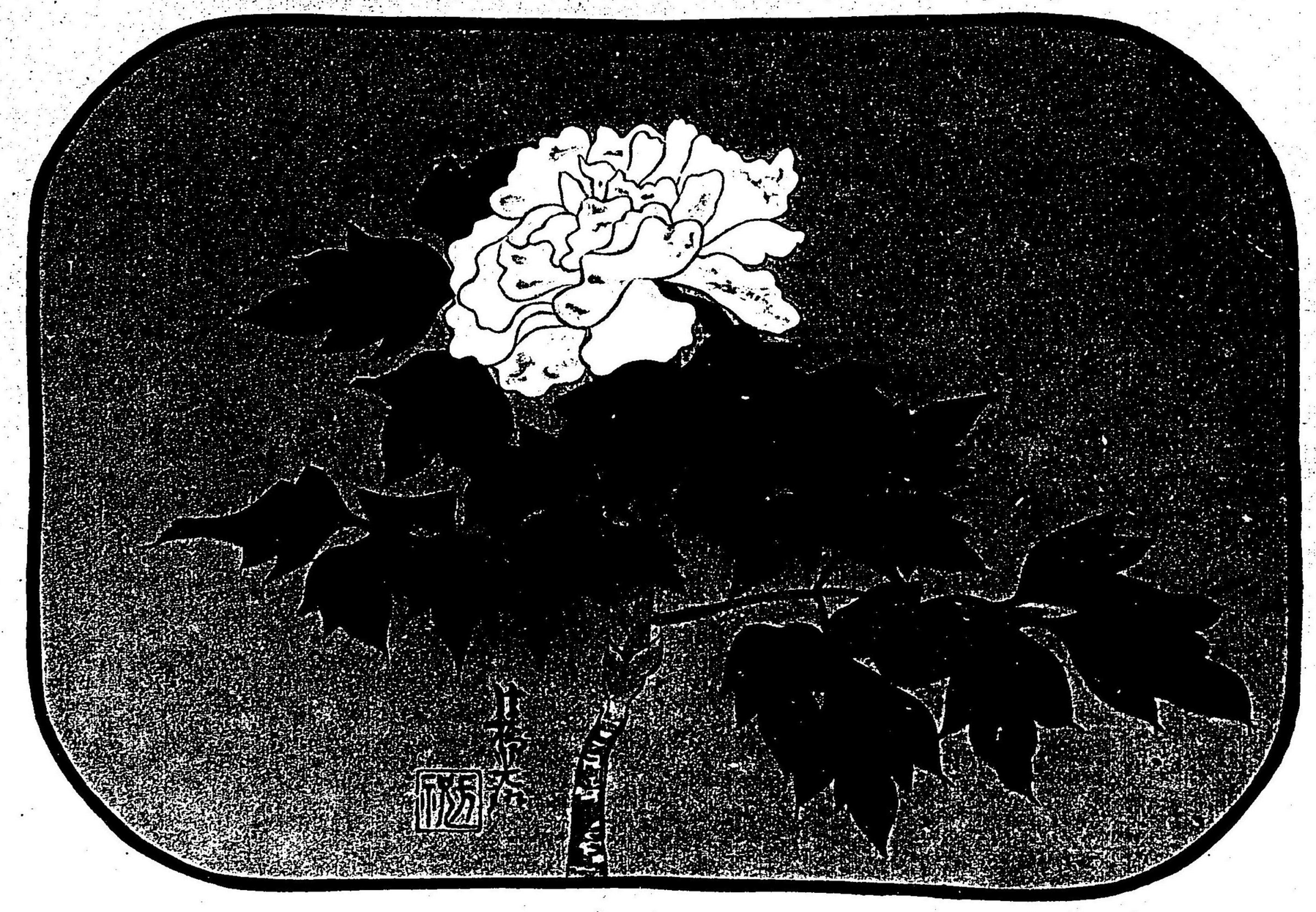
牡丹圖　一枚
李白觀瀑圖　一枚
橋燕子花圖　一枚
禊祓圖　一枚
楓樹圖　一枚
紅白梅圖　一枚
紅白梅圖　一枚
鶴鹿圖　一枚
菊花薄圖　一枚
風雷二神圖　一枚
四季草花圖　一枚
寒山拾得圖　一枚
蟲狩圖　一枚
扇面張交屏風　二枚
龜甲形陶盤壽老人圖　一枚
野宮圖硯奩　一枚

牡丹圖(紙本著色)

(縱一尺一寸二分、横一尺五寸七分)

東京　加藤正義君藏

此圖は僅々尺餘の小幅に一株の牡丹を描寫したるに過ぎずして、一見何等の奇なく妙なきに似たれども、仔細に看來れば經營布置滿洒にして筆致渾厚加ふるに其著色は色摺を以て示す如く、古幹は淡墨にして、莖と葉は綠青を以てし、花瓣は胡粉を塗り、而して葉脈は金泥にて之を描き、翠白粲然として、花神姿格に入るの妙あり、光琳の如き命世の大手腕を有する者にあらずんば爲んぞ能く是の如くなるを得んや、もし凡匠庸工をして這般の畫を作らしめば、趣味索然、殆んど玩賞の價値なき物とならんのみ



李白觀瀑圖(絹本淡彩)

(縦一尺二寸三分、横二尺三寸二分)

東京　佐藤　進君藏

李白字は太白支那唐朝玄宗時代の人なり、天資英邁にして幼より學を好み、十歳にして能く詩賦に通ず、曾て翰林の供奉となりしも、帝の寵姫楊太真と合はず、免官せられて廬山(江西省九江府南二十里に在り)に退隱し、詩酒の間に興を遣れり、安祿山反するに迨び、其部下の强請默許し難く、再び世に出でしが、祿山敗るゝや、坐せられて夜郎(貴州省)に流さるゝに於て途次洞庭(湖南省長沙附近)峽江(湖北省宜昌附近)の諸勝を歷觀す、後赦されて潯陽(湖南省岳州府西)河陽(江西省九江府)等に漫遊し、六十四歳の時金陵に歿せり、其詩は一々宇宙の靈機を發露せるものにあらざるはなく、杜甫と共に斯道の極を以て稱せらる

抜に出するものは、李白が曾て廬山に在りし時、開先寺の名瀑を觀て、日照香爐生紫煙、遥看瀑布挂長川、飛流直下三千尺、疑是銀河落九天と吟味せるの故事を描けるものなり、而して其間樣の如き、通常瀑布に附隨すべき峻嶮たる山巒を省かず、僅々一樹枝を點出して、おのづから銀河の九天より落下するの觀あらしめたるは、最も能く詩意を發揮したるものにして、豈凡ならず、且つ李白が小丘に倚りて之を仰望し、坐ろに詩思を催せるの狀寫し來て、筆々生動、紙絹上に溢れんとするの妙あり、這般の雲腕は到底他人の得て企及すべからざる所ならん

團扇面橋燕子花圖(紙本金地著色)

(縱横七寸九分、横横七寸七分)

子爵鍋岡孝弟君藏

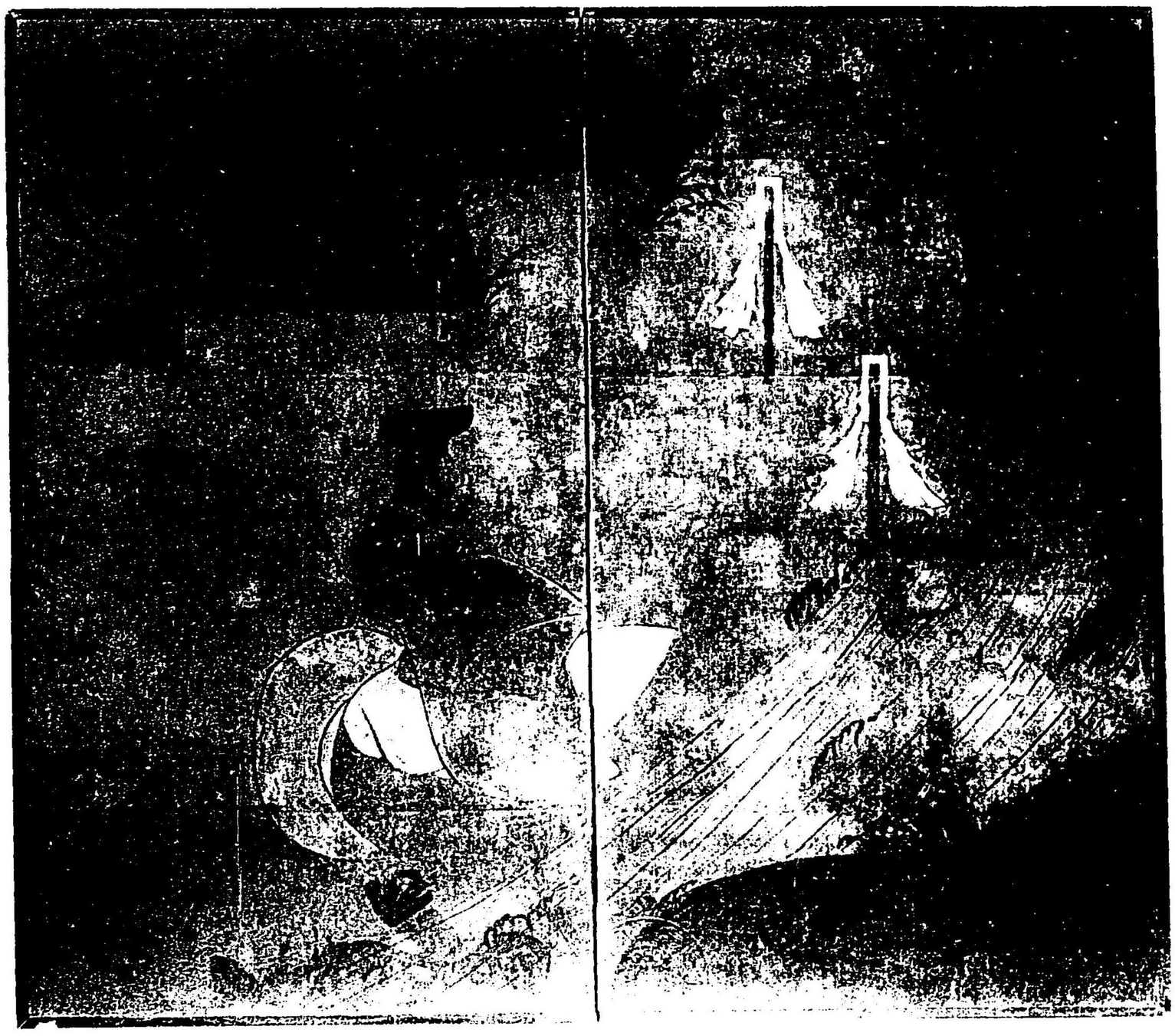
昔し在原業平朝臣阿保親王の第五子、元慶四年、五十六歳にて卒す、京都より吾妻に下りける時、三河の八橋今の碧海郡牛橋村字八ッ橋に其書讀ありと云ふと呼ぶ地に至りしに、澤水八方に分支し、其狀恰も蜘蛛の手に似たる溝渠あり、而して各溝皆一橋を架し、所謂八橋の名空しからず、其渠中燕子花水面を蔽ふて咲き亂れ、頗る美觀を呈せしかば、坐ろに吟情を催したりと云ふこと伊勢物語に見えたり、茲に示す所の畫は八橋を寫せるものにはあらざれども、其意匠は恐らく此に出でたるものならん、而して其橋に於けるや、僅かに一線を畫せるに過ぎず、圖體極めて簡短なれども、以て光琳が蒔繪の輕妙にして、墨氣の深潤なるを見るべく、妖艶なる叢根の燕子花と相對して、照映最も宜きを得たりと云ふべし

禊祓圖二曲屏風(紙本金地著色)

(縦五尺四寸八分、横五尺九寸九分)

侯爵佐竹義生君藏

光琳の畫たるや、土佐狩野の雨涙を陶冶し、光悅宗達の遺法を參酌して、專ら本邦の特風を發揮したるにあれば、從つて其畫題に至りても亦之れを我國の故事に取るもの多し、茲に掲ぐる禊祓の圖の如き、亦其一なり、禊祓とは、伊弉諾尊、筑紫日向の橘小戸に於て大御身を滌ぎ給へるに始まり、天武天皇以來歷朝の御儀式となりて、種々の故實あれども、要するに身に罪又は穢あるとき、河原に出で水にて身を淨め祓ふを云ふ、此圖は即ち陰陽師が河原に於て禊祓の式を行ふ所を畫けるものなり、筆致高古博彩優雅、光琳の作中最も風致に富めるものにして、寫然宗達の風趣に逼る、蛇籠及び流水の如きも、之れを後に出す岩崎家の扇面畫に比するに、全く別種の觀あり、是れ蓋し純ら宗達の遺法を追尋して、其眞を得たるものならんか



楓樹圖六曲屏風(紙本金地著色)

(縦四尺七寸八分、横一丈一尺六寸二分)

侯爵蜂須賀茂韶君藏

こゝに出す一雙の屏風は、紙本金地に數株の楓と二株の楓樹を畫き、之れに數根の秋草を按排したるものにして、光琳の畫中に在りては最も沈着の作なりとす、其用筆は悉く沒骨法にして彩色また例によりて濃艶を極む、蓋し普通丹青家の著色法は、先づ一色を施し、其乾くを俟ちて後始めて第二の色を施すを例とするも、獨り光琳に在ては然らず、宗達の遺法に從ひて更に自ら一機軸を出し、第一の設色未だ乾かざるに直ちに第二の色を施し、以下の數色亦皆爾かするを常とせり、本畫楓の幹部等に於て見る如き處々に色彩の斑點を留むるは卽ちこれが爲めとす、而して其色澤の一種異彩を放つ所以のもの亦實に此新畫法に因由するや明かなり

紅白梅圖二曲屏風一雙紙本金地著色）

（各縦五尺四寸九分、横六寸七分）

男爵岩崎彌之助君藏

茲に掲ぐる一雙の屏風は紙本金地に各一株の老梅を描きたるに過ぎざれども、展觀すること愛時清香馥郁樹影濃疎、白衣の高士が紅裳の美人と手を携へて來らんとするの妙趣あり、一は老幹半ば既に朽ち去りたる二三の若枝に無數の妖艶たる紅葩の笑を含む所を寫し他は孕々たる巨樹の一雨枝に白葩點々、清節を示すの趣を描けり、而かも其枝幹は例によりて骨法を用ゐず、直ちに墨汁を以て畫きたる上に緑青を加へ、且つ白綠青にて處々に苔を點じたるを以て、能く紅白の花瓣と相照映して一段の美觀を呈せり、蓋し畫梅は光琳の得意とせし所にして、其筆蹟また尋からずと雖も、茲に出せるもの、如きは、醍法雅麗傳彩鮮澤罕れに觀るの妙品と云ふべきなり

紅白梅圖二曲屏風一雙(紙本金銀地著色)

(各縱五尺一寸五分、横五尺七寸二分)

伯爵津軽承昭君藏

茲に出す紅白梅圖は、前に掲ぐる岩崎家所藏の同圖とは、またおのづから其意匠を異にせり、前者は單に各一株の梅樹を描きたるものなれども、此畫は則ち水邊の老梅を寫せるものにして、其凜然たる氷姿よく萬斛の香を儲へ、清奇なる玉骨遒かに纖塵を絕するの概あるのみならず、殊に水紋に於ける筆致の豪壯なる、到底他人の模倣すべからざるの妙あり、而して梅に於ては卽ち寫生の巧を盡し、水は頗る模樣の傾向を帶ぶれども、然も兩々相待て一種の調和を得たる處、さすがに光琳の技倆の非凡なるを窺ふに足れり、其著色は色摺を以て示すが如く、梅の枝幹は墨汁を以て描きたる上に白綠青を加へ、且つ處々に綠青と胡粉とを以て蘚苔を施し、花瓣は一は紅、他は白にして、金泥を以て蕊を描き、朱墨を以て蕚を寫せり、殊に注意すべきは流水に於けるの描法なり、其地は銀箔を押したる上に直ちに明礬を多量に混じたる膠水を以て水紋を描き、然る後硫黄を以て他の部分を酸化して鐵色を呈せしめ、更にまた礬水に膠を混じたるものを全體に塗布し、最後に水紋の上に銀泥を加へたるものにして、卽ち是れ光琳一家獨造の畫法なり、然れども其年月を經るの久しき、今は銀泥殆んど剝落し、箔地も亦一種の變色を呈するに至りたるも、揮灑の當時に在りては、淙々たる野水の、金地に於ける梅樹と相照映して、如何に鮮麗華美なりしかを想像するに難からざるなり

鶴鹿圖二曲屏風一雙(紙本金地著色)

(各縦五尺三寸九分横五尺九寸)

男爵岩崎彌之助君藏

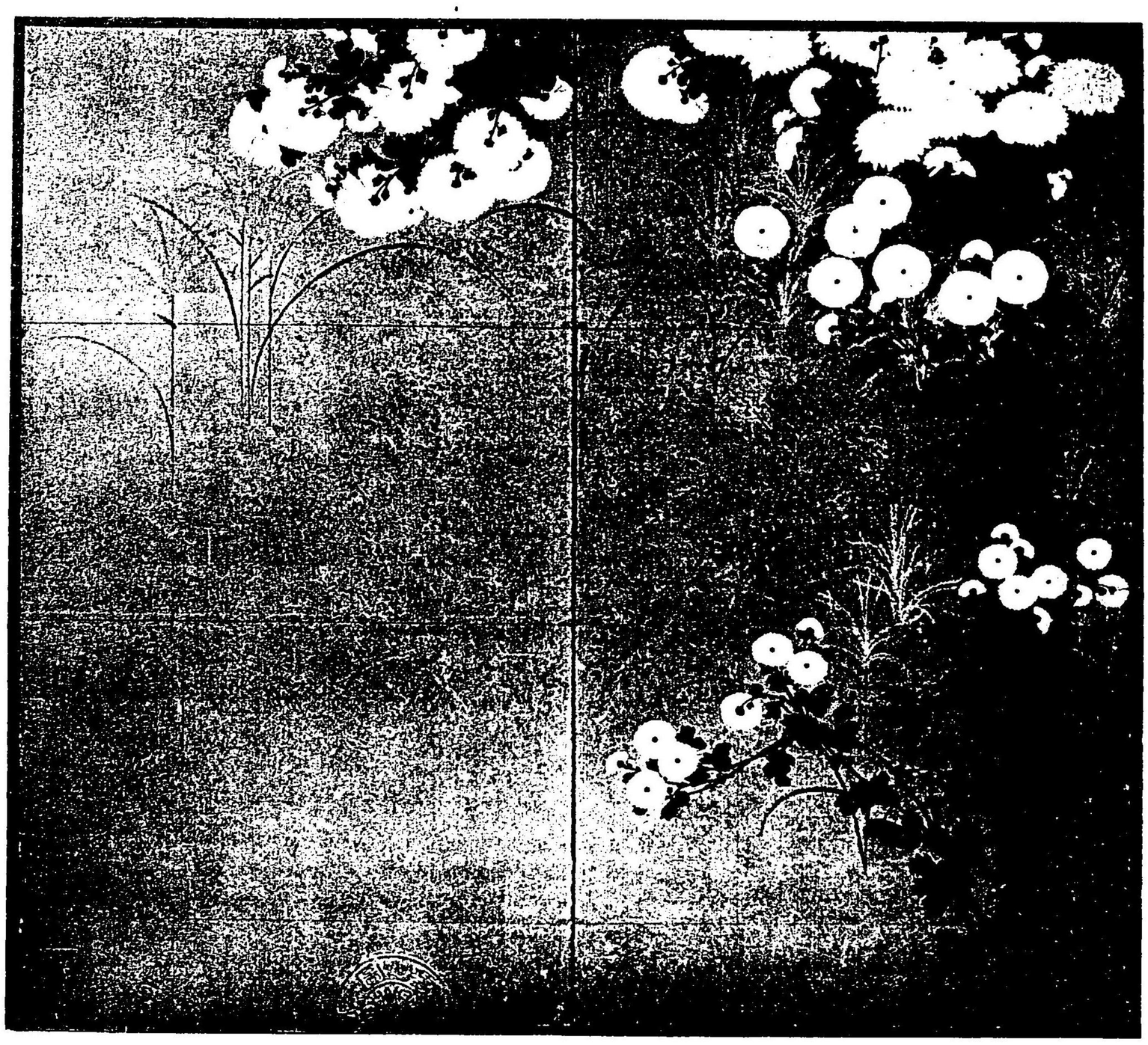
光琳能く意匠に富み、又圖案に長じ、一たび筆を執れば忽ち人意の表に出づるの畫を作る乃ち茲に掲載する二曲屏風の如きも亦其實例なり、鶴を畫きて楓樹を配する是れ既に奇況んや鹿に配するに櫻を以てするに至りては更にまた妙ならずや而して樹枝根幹の形狀及び鶴鹿の姿態の如き構思超凡、一見人をして驚異せしむるものあり、然れども其筆勢優麗傳彩豐潤にして氣宇の高邁なる、諦視するに從つて次第に無限の趣味を感ずるに到るべし、蓋し此一雙の屏風畫は、光琳の作中に於て最も其特長を發揮せるものと云ふべきなり

菊花薄圖二曲屏風(紙本金地著色)

(縱五尺六寸五分、横六尺六分)

伯爵清口直正君蔵

光琳の畫多くは飄逸にして奇趣に富む、然れども時に其用筆の端正縝密なる、尚ほ此畫の如きものあり、是れ彼れの技倆の多方面的なる所以なるべし、此畫は僅々數枝の白菊と若干の薄とを描きたるに過ぎざれども、其布局の整然たると、圖樣の清新なるとに由りて、畫面の美觀言ふべからず、殊に其著色の如き、菊の莖及び葉は綠青を以てし、其葉脈は金泥にて之を描き、花瓣はすべて光琳の特長たる所謂置上げにして、頗る精巧を極めたり、且つ地紙は檀紙なれば、紙面に無數の波線狀を呈し、普通の繭素の如く平滑ならざるに拘らず、運筆自在にして些少の澁滯を感せざる所、さすがに光琳の妙手腕を窺ふに足るべく、眞に珍重すべき名品と稱すべし



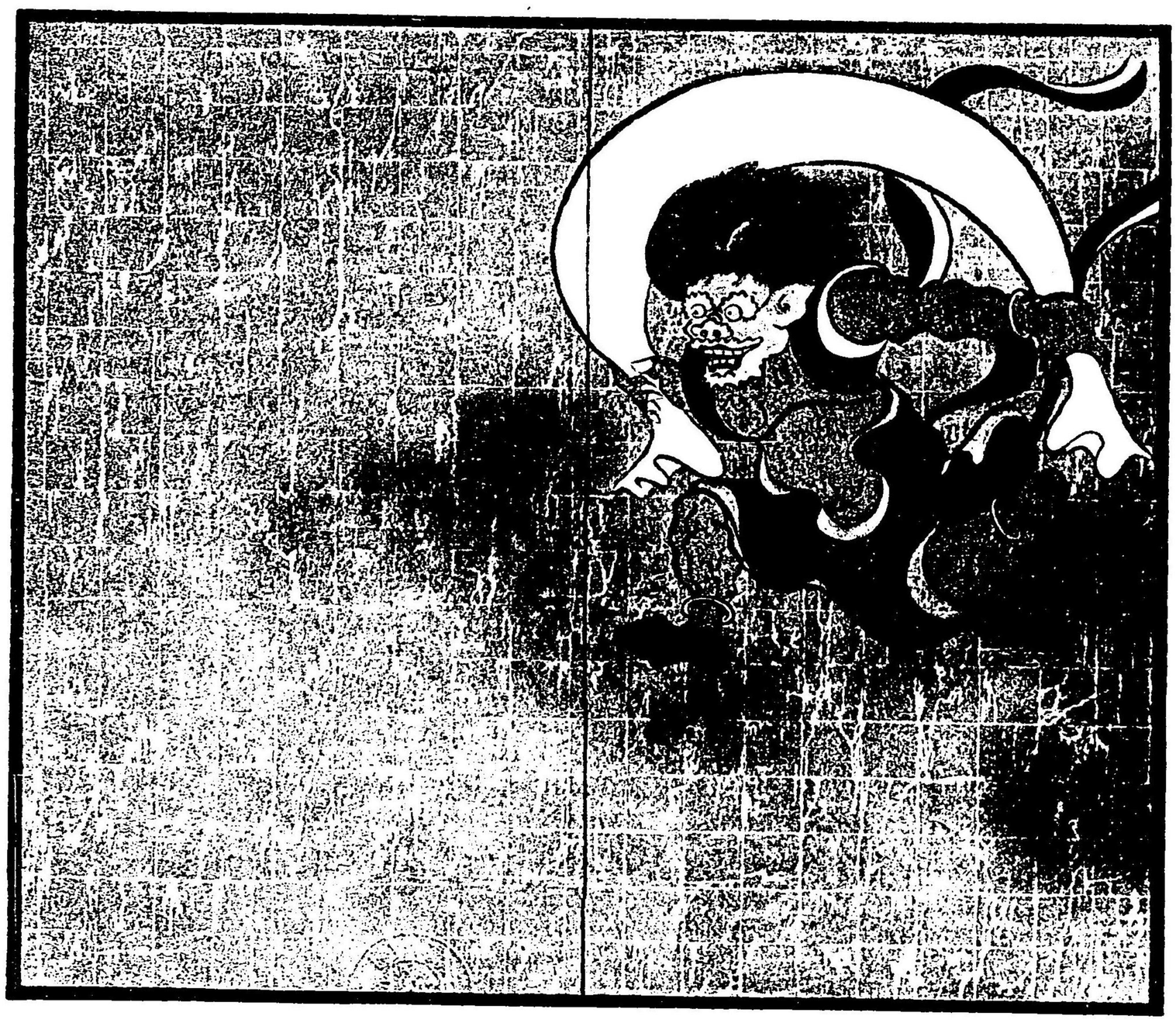
風雷二神圖二曲屏風一雙(紙本金地著色)

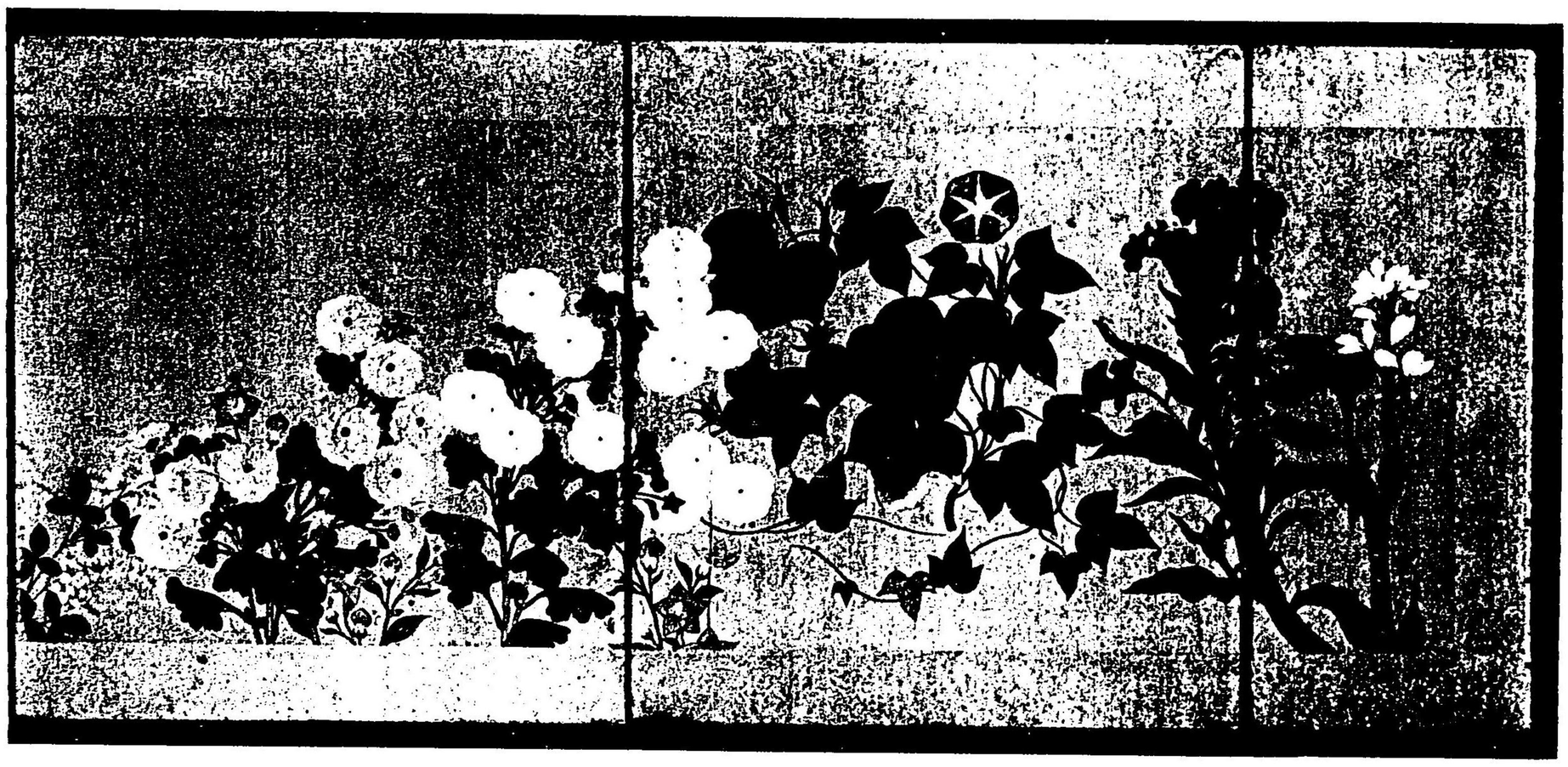
(各縱五尺四寸五分,横六尺四分)

伯爵徳川達孝君藏

風神は梵語に嚫度と稱す,帝釋天に隨伴して時に天車を同うし又或は百千の駿馬を駕せる輕快なる光明車に乘ずることありと云ふ,印度の最古經典理具韓陀の中に,この神を讃せし頌あり,其記する所によれば,此神の本體は普通に謂ふ所の風なれども,この風は諸神の靈魂天地の本にして,其聲聞くべきも其形見るべからずと稱す,雷神も亦其もとは無形の雷鳴を指せるものなること疑なし,抑二神の像が二十八部衆と共に寺院に安置せらるゝを見れば,元來波羅門の神なりしも,後に佛教内に鈎召せられたるものなるべし,而して本圖に見る形像の如き,支那に於ては,佛教の始めて渡來せる漢時代に於て,早くも之を描きたるものありとの說あり

光琳の私淑せる俵屋宗達等て二神の像を畫きしが,其二曲屏風現に京都の建仁寺に藏せり,茲に出すものは即ち其畫によりて描きたるものにして,圖樣落筆殆んど異なる所なし,但,彼れは高雅風韻餘りあるも筆才此れに及ばず,此れは筆才餘りあるも高雅風韻彼れに如かざるの觀なきにあらず,其一長一短蓋し兩家の資性おのづから然らしむる所なるべし,然れども今仔細に此畫を見るに,其線條輕快にして,配色また巧瑟,殊に溶洩たる黑雲の描法の如き,具に入神の妙あり,到底古人の精粗を甘しとする凡匠庸工の企て及ぶ所にあらざるなり,古來世人が一橋家(即ち徳川伯爵家)の風雷神と稱して,光琳の傑作中先づ指を此一雙の屏風畫に屈するも偶然にあらずと云ふべし





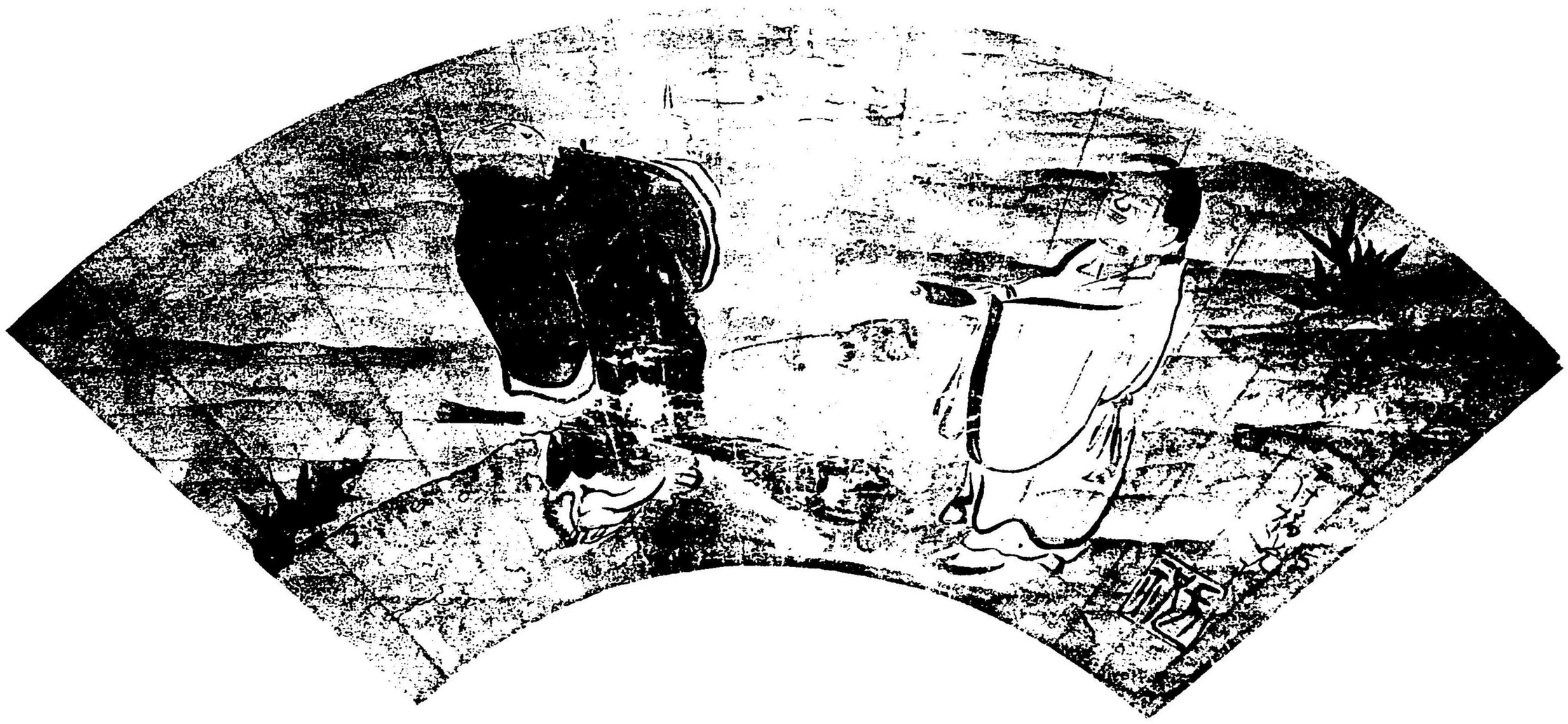
扇面寒山拾得圖(紙本著色)

(縱五寸七分、横上徑一尺五寸五分、下徑七寸二分)

東京　別府金七君藏

支那唐朝憲宗帝の時に當り浙江省台州府西の天台山國清寺に豐干禪師と名づくる高僧あり、遊錫の次、一子を拾ひ得て歸り、其名を拾得と呼び、灌掃庖厨の事を知らしむ、忍修苦行精敏絶倫なり、常に餘殘の菜滓を竹筒の中に貯ふ、當時台州唐興縣の寒巖に孤棲せる一貧士あり、其名を寒山と云ふ、人と爲り癡野にして、破衲襤褸を纏ひ、時々國清寺に來り、拾得よりかの餘飯殘菜を與へられて之を喫し、或は獨語獨笑し、或は牧童村兒と嬉戯歌唱し、其態全く風狂に異ならず、二子皆詩を能くす、超逸絶塵にして古の名流と雖も尚ほ劣弱する能はざるものあり、台州の刺史閭丘胤未だ任に就かざる微賤の頃、豐干禪師に會晤し、其言によりて寒山は文殊大士の權化、拾得は普賢大士の化身にして、風狂貧子に似たれども、其に仰で師とするに足るものなるを知り、赴任後三日、自ら國清の禪宿に往いて之を禮せしに、二子乃ち呌して曰く、豐干は德吝の徒のみ、汝彌陀をも知らず、我を禮して何かせんと、走りて寺を出で、寒巖に入りて復た出で來らず、此に於て胤は止むことを得ず、二子が竹木石壁等に錄せる詩偈を蒐集し、世に傳へたりと云ふ、かの寒山子詩集又は三癖詩集(三癖は二子と豐干となり)の名を以て今に至るまで世に行はるゝもの即ち是れなり

茲に掲ぐる扇面は即ち寒山拾得二子が逍遥悠々、遊戯三昧の狀を描けるものなり、扇面の上部は泥引をなし、土膠は墨汁にて畫きたる上に銀泥を加へ、二子緋衣の彩色は、一は群青にして他は白緑青を用ゐたり、而して其面貌姿態の如き、悠揚として迫らず、おのづから至人遯迹の妙あり、此畫が古來光琳の一名作として珍重せられたるもの、偶然ならずと謂ふべし



扇面蟲狩圖紙本著色

（縱五寸五分、横上徑一尺五寸七分、下徑七寸一分）

東京　岸　光景君藏

元祿時代に於ては扇面に種々の圖を描くこと頗る流行せしもの、如し、故に光琳が扇面畫を作ることの多かりしも亦其時尚に投じたるためならん。こゝに掲ぐる蟲狩の圖の如き、中に就きて最も優秀なるものなりと稱せらる。その紆紆たる一條の細流より、處々に茂生せる薄、女郎花等に至るまで、よく秋色の闌なるを示し、而して將に蟲を捉へんとする者、既に之を捉ふる者、其他個々の人物、盡く個個の風丰情姿を寫出し、加ふるに筆致巧美、設色艶麗、殊に衣服の模樣の如きまた光琳獨得の妙を發揮して餘蘊なし。今其彩色を略說せんに、扇面を貫くの野水は群青にして、其細流の線條は銀泥を以て之を描き、草は大抵白群青と綠青とにして、花は多く胡粉を以てし、又處々に金泥の霞彩を施せり。更に衣服の模樣に至りては乳金を以てせるあり、朱具を以てせるあり、或は老紅色あり、或は苔綠色あり、彩華絢爛として美觀實に言ふべからず。吾人は此畫を以て光琳の作中實に得易からざるの名品なりと言ふに躊躇せざるなり

扇面張交六曲屏風一雙(紙本金地)

(各縦五尺五寸、横一丈二尺三寸)

男爵 岩崎彌之助君藏

茲に掲ぐる一雙の屏風は、檜紙の金地に、各十三葉の扇面を交錯布置したるものなり、其書蹟は大抵抱一の著はせる光琳百圖中にも出せる名品にして、山水あり、人物あり、花卉あり、翎毛あり、而して落筆の或は磊落なるもの、或は縝密なるもの、色彩の或は濃艶なるもの、或は淡泊なるもの、六法彙備、滿紙生動し、加ふるに其匠心の獨得にして、烘染の宜きを得たる按排の奇拔にして、命意の淵微なる、眞に光琳の面目を窺ふに足る好個の標本なり、然かも單に屏風の全體を寫出したるのみにては、其形小にして筆致賦彩の妙を十分發揮する能はざるの憾あるが故に、殊に畫中の秀拔なるもの十葉を撰びて別に大寫し、一々其設畫の要を略說せんとす、覽者宜しく之に徵して以て其全韵の貴重なるを知るべし

富嶽圖(縦四寸、横上徑一尺三寸八分、下徑八寸一分)

古人嘗て光琳の一富嶽圖を評して曰く、濃墨を以て水際の岩を作り、乳金を用ゐ潑して墨汁に混す、山頂白粉を塗り、山麓石青を塗り、石縁を用ゐて松樹を作る、粲然として觀るべし、もし他人をして此を作らしめば、則ち凡俗觀る者をして唾を發せしめんと、以て此畫の評と爲すに足る

仲國尋小督局圖(縦五寸八分、横上徑一尺六寸二分、下徑七寸三分)

小督局は權中納言藤原成範の女にして、高倉帝の寵姫なり、禁中第一の美人にして、最も彈琴に巧みなり、相國平清盛故ありて之を殺さんとするや、小督潛に宮を出でて嵯峨の民舍に匿る、帝大に之を悲み、彈正大弼源仲國に命じて之を尋ねしむ、時正に中秋、清曠の氣天に滿つ、仲國獨り騎し、月を踏みて嵯峨に到り、遙に琴聲を聞きて、其曲の想夫戀なるを知り、自ら横笛を吹奏して之に和し、遂にいざせき柴折戸の裡、小督を尋ね出し、伴ふて宮に歸りしと云ふ、此圖は即ち其故事を描けるものなり、筆勢頗る豪放にして、門墻等に於ける描法の如き、一見殆んど畦逕の外に脫したるの觀なきにあらずと雖も、仔細に之を諦觀し來れば、敗墻頹門却て落寞たる草屋の情景を寫し得て餘蘊なきものと云ふべく、離々として茂れる草花は、皎々として冷輝を放つの秋月と相待て、眞に斷腸の情を催さしむるものあり、而して其配色は門、墻、柱、樣等いづれも墨汁を以て描きたる上に銀泥を注加し、草は綠青、月は銀泥にて彩れるが如き、趣致頗る幽遠なりと云ふべし

馬上人物圖(縦五寸九分、横上徑一尺七寸四分、下徑八寸一分)

昔し在原業平朝臣、京都より東に下りけるとき、伊勢尾張の二國に沿へる海岸を行き、眼前白浪の起れるを見て、いとゝしく過行くかたの戀しきにうらやましくもかへる波かなと咏めること伊勢物語に見えたり、此圖は蓋しこの故事を描けるものならん、其著色は濃華富麗にして、彩霞と濱地とは金泥、數箇の岩石は朱土に墨汁を混じたるものを以てし、波線は淡墨にして、盛裝せる馬上の人物と相照映し、頗る美觀を呈せり

巖浪圖(縦四寸九分、横上徑一尺六寸九分、下徑九寸三分)

光琳の技倆は頗る多方面的にして、畫題の異なるに從ひ、機鋒百出、變化千態、以て能く種々の特色を發揮せり、就中本畫に於て見るが如き、潤滑なる奇岩怪石、浩瀚たる怒濤激浪に至りては、實に光琳一家の體法にして、到底他人の企及する能はざるの妙味あり、此畫、波線は墨汁に銀泥を加へたるものと、金泥とを錯綜交互して成し、波體には水青色を施せり、又岩は群青と綠青と倶に之を用ゐたり、其風趣の高雅にして、氣韻の優逸なる幾回把玩するも尙ほ飽かざるを感ずべし

蛇籠圖（縱五寸八分、横上徑一尺六寸一分、下徑七寸三分）

蛇籠は形體長大にして且つ粗く編める竹籠の中に大小の石を滿て、河岸に積みて堤防の用を爲すものにして、其形恰も大蛇の臥すが如し、是れ其名の來りたる所以なり、此圖全體の描寫排置極めて磊落なるのみならず、水流の線條等に於ける筆力の勁拔にして、彩墨の淋漓たる、光琳の作中、蓋し希れに覩る所の逸品なり

林和靖圖（縱四寸九分、横上徑一尺六寸九分、下徑九寸四分）

林和靖名は逋、支那宋朝の人なり、杭州錢塘に生る、性恬淡にして古を好み、榮利に超らず、家貧にして衣食足らざるも晏如たり、廬を西湖の孤山に結びて之に居り、城市に入らざるもの二十年、眞宗其名を聞き、粟帛を賜ふ、其卒するや、仁宗悼惜して和靖先生と謚す、逋行書を善くし、詩に長ず、其飼澄澄峭特にして奇句多し、常に雙鶴を畜ふて之を愛し、興來れば小艇を浮べて西湖の諸寺に放遊す、其不在の時、もし客の至るあれば、童子乃ち鶴を放つに、逋良久うして歸り來るを例としたりと云ふ、此圖は卽ち逋が孤山に棲隱し、茅簷に坐して、梅を愛し鶴を侶とし、優遊自適する所なり、而して其殊に濃彩を用ゐず、草々揮灑し去て逸氣橫生するところ、よく和靖の面目を紙上に躍如たらしめたるを覺う

赤牛花圖（縱四寸七分、横上徑一尺六寸七分、下徑九寸八分）

本畫は單に赤牛花を描けるに過ぎざれども、筆路圓熟にして墨氣芳潤、加ふるに群青を以て彩れる數輪の花瓣は、金泥を以て描ける四五の支柱と相照映し、能く津々たる一種の風趣を發揚せり

富嶽圖（縱五寸八分、横上徑一尺六寸八分、下徑七寸七分）

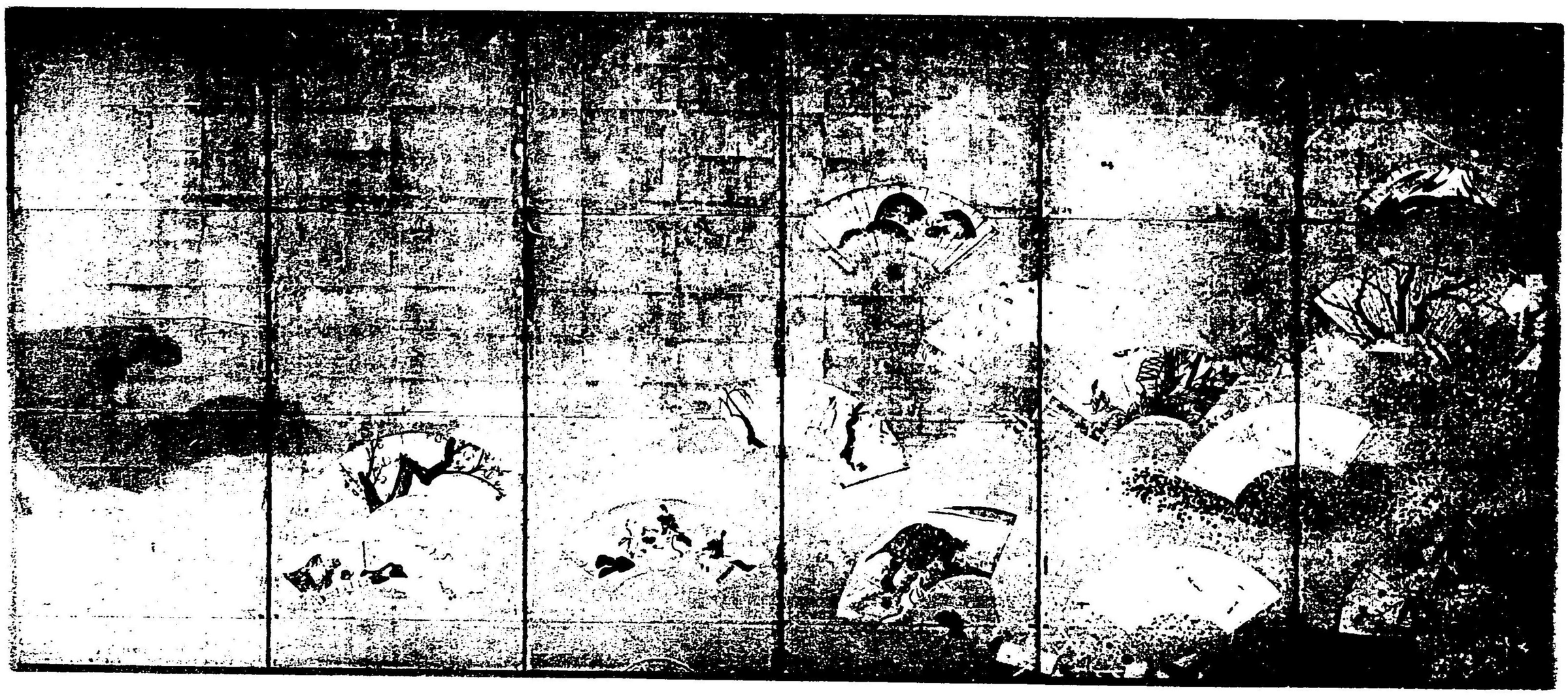
本畫は前に掲ぐる富嶽圖とはまたおのづから其意匠を異にせり、若し强ゐて兩者の別を許すれば、前者は卽ち寫意にして、後者は寧ろ寫生に近しと云ふべき乎、而も兩者の趣致高遠なるに至りては則ち一なり、其彩法また大同小異なりとす

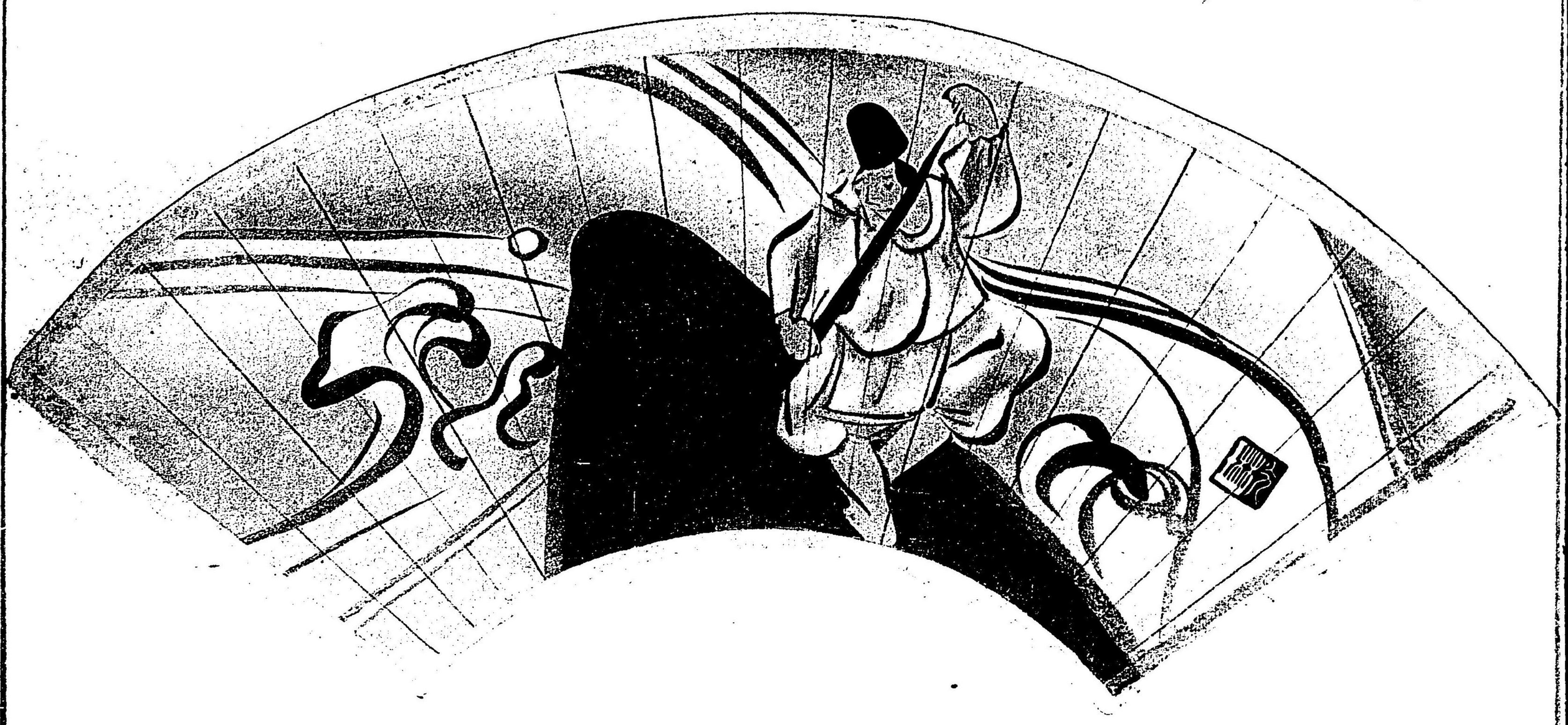
宇津山圖（縱六寸、横上徑一尺六寸四分、下徑七寸）

本圖は在原業平が東下りの時、駿河國宇津の山に到り、蔦羅生ひ茂り、蹊路陰閉なる處、客愁頻りに起り、懷惱殆んど耐え難き時、終ち幽谷跫音を聞き、かねて知り居る一個の修行者に遭ひしかば、綿綿たる情緒を籠めたる文を托して、京都なる戀人の許に送致したりと云ふ、伊勢物語の古意を寫せるものなり、描寫簡短なれども、寂寞たる山道の景趣及び修行者の態度閑逸なるに引かへて、都人士の疲憊困厄せる情姿十分紙上に發現せるを見る、其著色は修行者の法衣を淡墨とし、業平の上衣を藍灰色、下裳を鼠色とし、又二株の樹木中、松は朱土に墨汁を混じたるものを以て、他は墨汁の上に銀泥を加へて、各其枝幹を寫し、葉はいづれも綠青を以てせり、山趾土陵の如きは朱土を以て之を塗り、且つ白綠青を以て之を暈染したれば、艶麗秀雅、供に備はり、一種言ふべからざるの妙あり

棹舟圖（縱五寸八分、横上徑一尺七寸、下徑八寸）

光琳の畫の意態宏邈にして氣格跌宕、布置簡潔にして、筆路暢暢なるは世既に定論あり、敢て注解するの要なきに似たるも、茲に出したる棹舟圖の如きは、僅々數條の波線と一個の人物と扁舟の半とを描寫せる間に、光琳の躍々たる眞面目を掬すべきものなしとせず、其下筆の流暢なるは言ふまでもなく、著色の如きも、人物の衣服波及び舟に於ける線條はすべて墨汁の上に銀泥を加へてこれを暈抹し、衣服及び波體は胡粉舟の全體は金泥を以て塗り、秀發淡雅の氣紙上に溢る





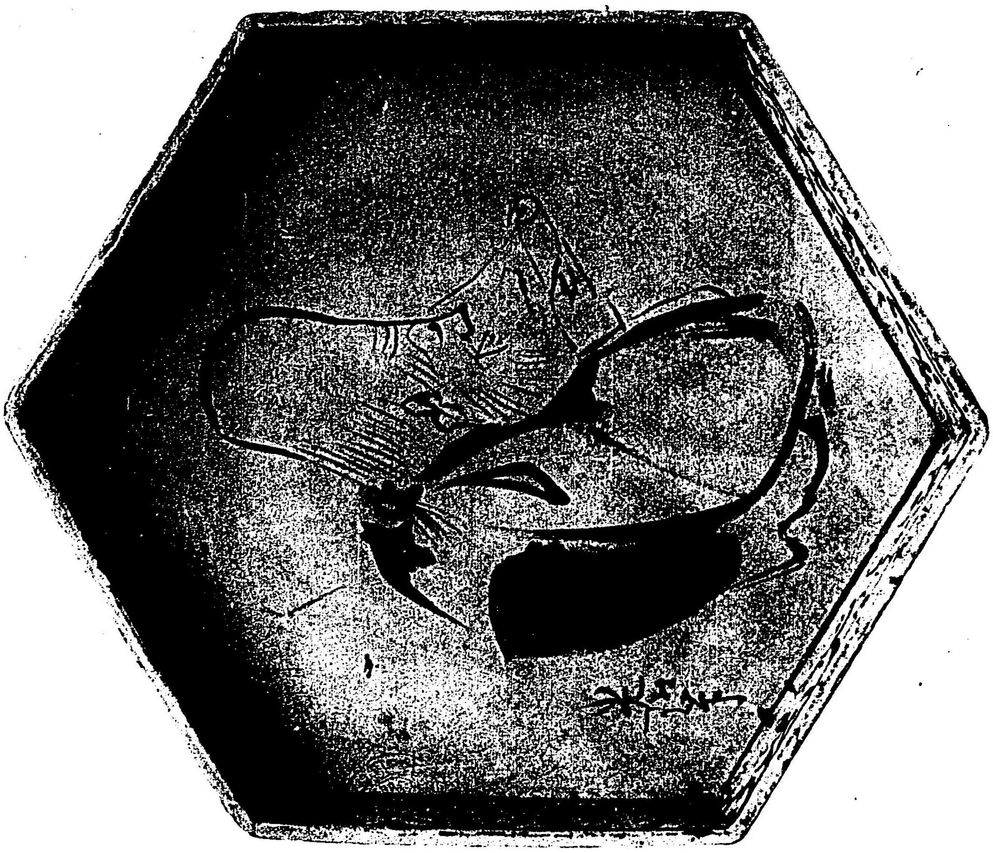
龜甲形陶盤壽老人圖

（縱横九寸、横横八寸、高一寸）

子爵福岡孝弟君藏

支那宋朝哲宗の元祐年間京師に一老人あり、其長纔に三尺、秀目豊髯、身首相半ばす、常に幅巾野服し、賣卜を以て市に遊び錢を得れば則ち酒を飲む、哲宗召して內殿に入れ問ふて曰く、今年幾許ぞ、老人曰く、臣南方より來る、酒に耽り、醉へば則ち能く言ふと、遂に之に酒を賜ふに、半飲すること一石、且つ曰く、廣黃河の清めるを見ると、仍て帝涇渭之を辨ず、忽ち清風庭に滿ち、白雲空に映するを覺う、而して其人何くに行きしや、去つて迹なし、翌朝太史奏して曰く、壽星帝座に聯ると、帝奇之を異む、乃ち時昔見る所の老人は壽星なりしことを知り、遂に其圖を取り、之に讀して曰く、老人星號老人星、一朝酒醉見天庭、黃河廣見清於世、試問長生不見形、蓋し千歲一たびも清まざるを以て名ある黃河の廣々清めるを見るとは、其壽の無量長遠なるを意味したるものならん

此陶盤は光琳の弟乾山(其傳は後冊に詳出す)の作る所なり、其形六角にして龜甲狀を成し、全體に白釉を施せり、而して裏面に乾山の二字を書す、又壽星老人の畫は、落款の示すが如く、光琳の揮灑する所にして、黑釉を以て之を描けり、圖體極めて簡單、落筆頗る豪放なれども、而も能く相好溫和なる一老人を現出したるところ、無限の雅趣盤中に溢るゝを見る、乾山の妙工を飾るに光琳の雙腕を以てす、錦上更に花を添ふるものと云ふべきなり

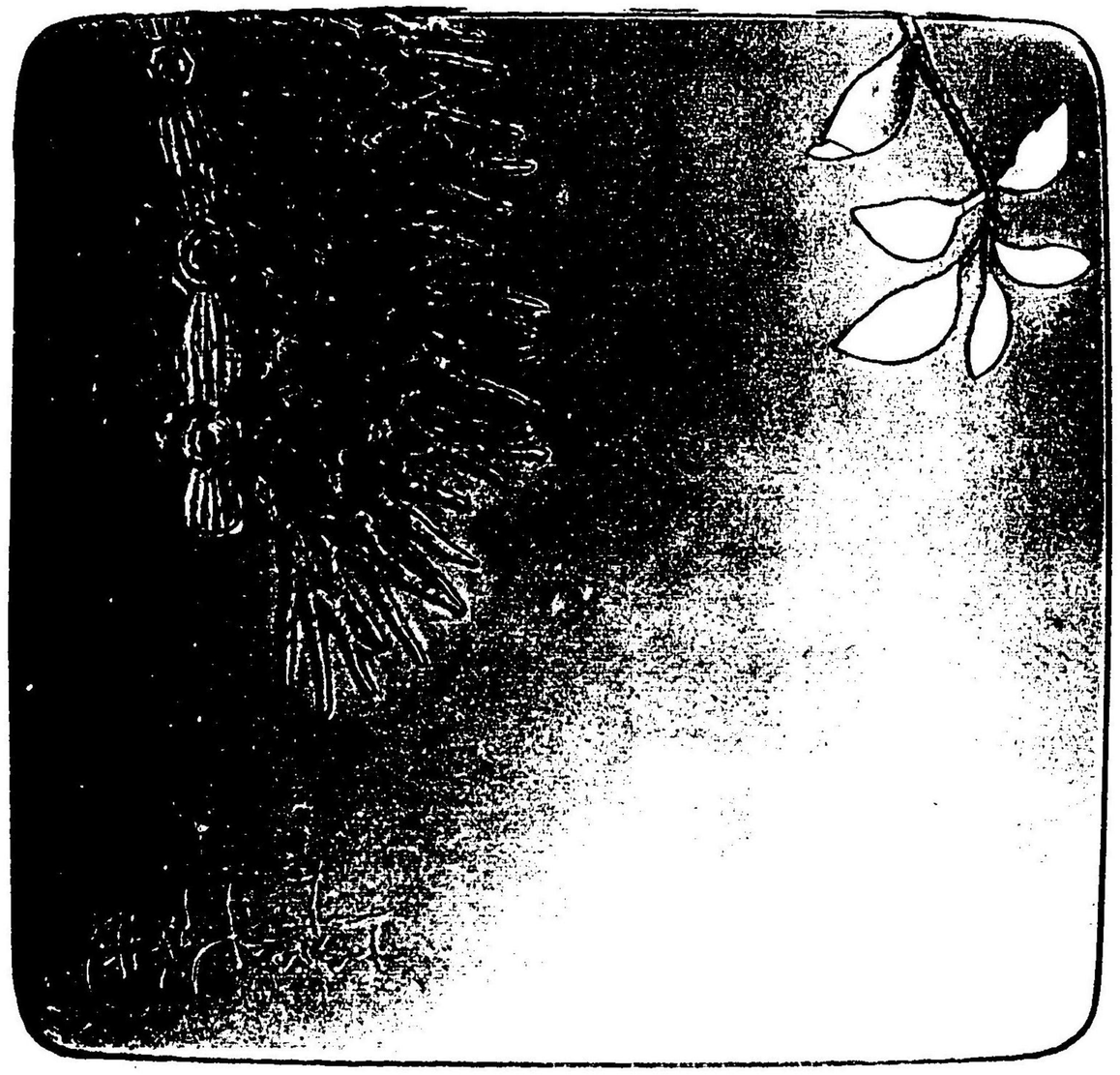


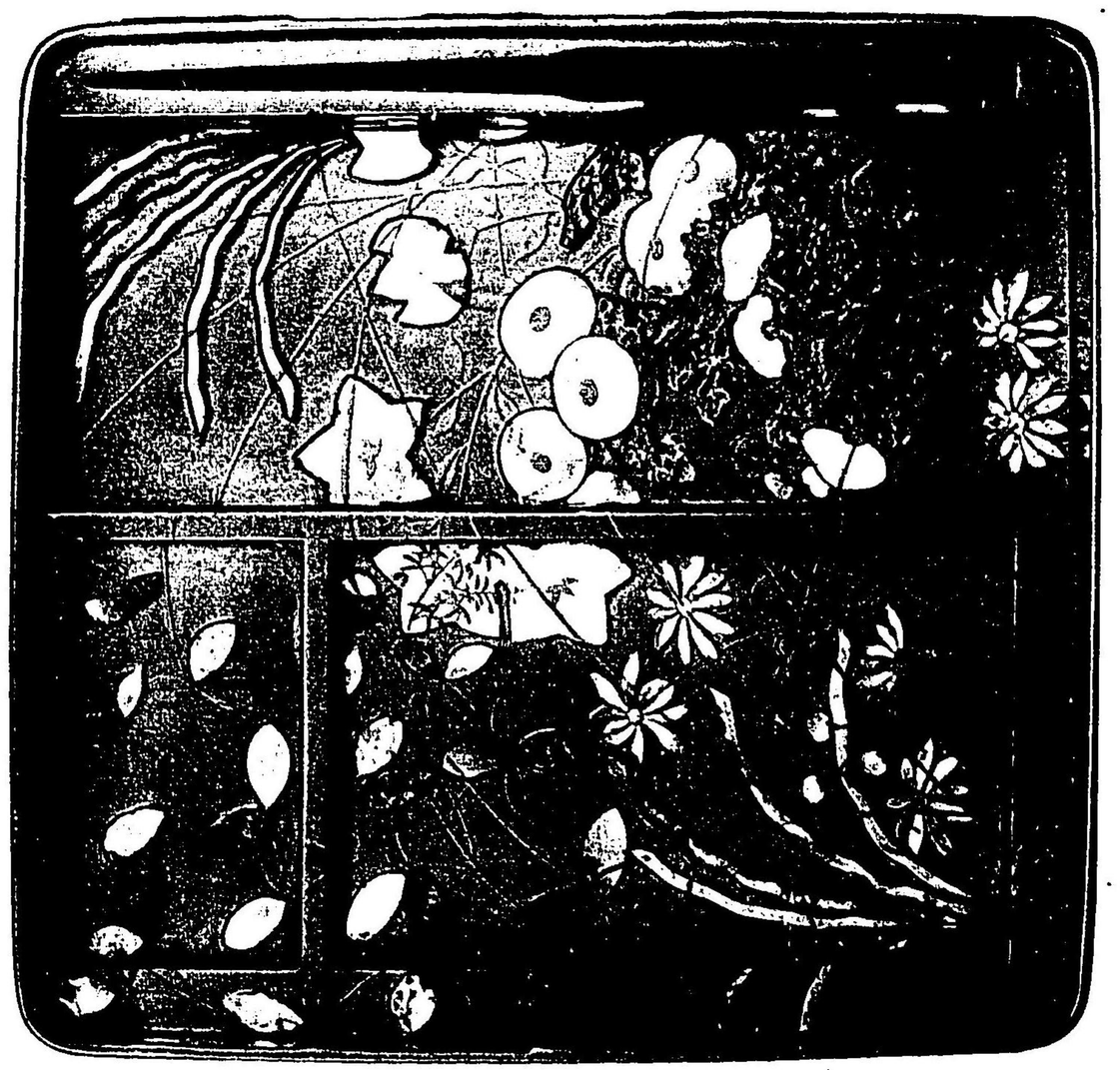
野宮圖硯蓋

（蓋面七寸二分、横六寸六分）

東京　加藤正義君藏

往昔歴代の天皇位に即き給ふや、未だ婚嫁し給はざる内親王又は女王を選びて伊勢の神宮と京都の加茂神社とに奉仕せしめ給ふを例とせり、これを齋王（いつきのみこ）と云ひ、其居處を齋宮（いつきのみや）と稱す、而して伊勢なるを齋宮加茂なるを齋院と即ち野宮（のみや）は即ち内親王又は女王が齋宮に立ち給はんとする時、先づ齋戒の爲めに住み給へる處にして、洛西嵯峨天龍寺の艮なる竹林中にあり、伊勢太神宮を勅請す、而して祠前に黒木の鳥居を建て且つ廻らすに小柴垣を以てしたるは古來の遺風なりとぞ、故に謡曲にも、われ此森に來てみれば黒木の鳥居小柴垣昔にかはらぬ有樣なり云云と云へり、茲に出せる硯蓋は即ち意匠を野宮に取りたるものにして、蓋の表面より盒の底にかけて鳥居、榊、小柴垣を現はし（第一圖）、内部はすべて嵯峨野に因みて秋草を寫出せり（第二圖）、今其材料の使用法を略説せんに、蓋の全體すべて金地平目入にして、鳥居、榊の枝幹及び柴垣は悉く鉛を用ゐ、榊の葉は青貝を嵌入せり、また萩、桔梗、女郎花、野菊等の葉は蒔繪にして、葉はいづれも蒔繪に交ゆるに、鉛を以てし、白菊は蕚葉共に鉛薄の穂は鉛と錫とを交錯し、桔梗、白菊及び野菊の花はすべて青貝を嵌入し、萩の葉にもまた處々に之を施せり、其意匠の斬新奇拔にして圖樣の古雅優秀なるは言ふまでもなく、鉛錫青貝を自由自在に使用したるの手腕に至りては古今罕れに觀る所にして、其技工の巧を求めずして自ら至巧を極め、妙を欲せずして自ら至妙に達せる處、即ち光琳獨得の技倆なりと言ふべく、光悦と雖も亦容易に凌駕する能はざる所なりん、蓋し此現蓋は光琳一代の作中に在りても、殊に非凡の優品にして、洵に尊重愛惜すべきものなり





不許複製

明治三十六年七月二十五日印刷
明治三十六年七月二十八日發行

編輯兼發行者　京都市上京區南禪寺町三十三番戸　田島志一

印刷者　東京市下谷區二長町五十二番地　梶間春三

寫眞製版印刷所　東京市日本橋區久松町三十七番地　東京製版所

活版印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　東京築地活版製造所

發行所　東京市下谷區二長町五十二番地　審美書院
（電話特下谷一一二六番）

069812−001−1

400−55

光琳派画集

田島　志一／編

第1

M36−39

CEC−0575

400
55